ダルフール紛争～永続的平和を実現するための和平プロセスとは～

外国語学部英語学科４年　田中　佑美

冷戦終結とともに大国同士の対立も終わりを告げ、世界は平和になったかのように見えた。しかし先進国の多くで安定した平和が得られるようになった一方で、途上国地域では宗教的対立や国内の異民族対立に端を発した内戦が増加し続け過酷な状況の中で日々多くの命が失われている。他国で日本人に被害が及ぶと連日大きく報じられるのに、もはや正確な被害者数を確認することも不可能なほどたくさんの人が犠牲となってきた世界各地の内戦に関してはよほど深刻な事件が起こらない限り新聞やニュースで取り上げられることもない。人の命の重さに差はないはずなのに途上国で起こる問題は忘れられ多くの日本人はその実態を知らなかったり、意識的に目を背けたがったりする傾向が強いのではないだろうか。しかし国際社会の一員として私たちには内戦や貧困の実態を理解し現在自身が受けている平和の恩恵を途上国の人々に提供していく責任があると考える。その小さな第一歩として現在まさに進行中の紛争をひとつ選択し平和的終結に向けた努力の過程を追ってみることにした。

内戦の激しいアフリカ大陸に位置するスーダンでは 1990 年代以降のイスラム主義の台頭をきっかけに始まった国内武力闘争の結果、2003 年のピーク時から現在までに約 20 万人が死亡し 200 万人以上が難民もしくは国内避難民になったと言われている。国連が世界各地の紛争に介入して平和構築の手助けを積極的に行うようになって久しいが、一般にダルフール紛争と呼ばれるこの内戦に関しては国連の介入も断続的で何度か停戦合意が結ばれたにも関わらず戦闘の終結には至っていない。そこで本稿は一時的な和平を経験しつつもそれを永続させることのできていないダルフール紛争の特異性に注目し、完全な形での紛争終結実現のために取りうるアプローチを考察することを目的とした。

ダルフール紛争のきっかけや関係諸国の対応、意図等を比較した結果、植民地時代の苦い経験から他国の干渉に拒絶反応を見せるスーダン政府と過去を振り返ることのない平和的解決法を模索する国連をはじめとした国際社会の考えとの間に大きな溝が存在することが明らかになった。この溝を埋めるためには、これまで権力者同士の話し合いの中で幾度も結ばれてきた形式的な和平合意ではなくスーダン国民が主体となった草の根的アプローチを模索するためにも国際社会の代名詞ともいえる国連と比較的スーダン政府の立場に近いアフリカ連合が協力して平和維持活動を進められる環境の存在が不可欠になると考える。2007 年に始まった UNAMID ミッション（国連・AU 合同平和維持部隊）が文化の多様性や考え方の違いを理解し認め合えるような社会作りに貢献できる活動へと発展し民族の壁を越えて協力する意識が生まれれば、それが他民族の共存するダルフール地方に永続的平和をもたらす原動力となるのではないだろうか。

<u>主要参考文献</u>

・武内進一編 2007/3「アフリカにおける紛争後の課題－共同研究会中間成果報告－」
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所

・Lee Feinstein 2007 "Darfur and Beyond What Is Needed to Prevent Mass Atrocities" CSR NO.22, January2007 Council on Foreign Relations